

---

# ラブカクテルス その84

風雷人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラブカクテルス その84

### 【Nコード】

N2345F

### 【作者名】

風 雷人

### 【あらすじ】

今宵はカクテル作りのプロがお入れしたその味をご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は資格マニアでございます。

ごゆっくりどうぞ。

自分は緊張しまくっていた。

時計を覗く目がなかなか離せずにいる。

なぜなら今回挑んだ資格は、難題極まりなかったからだった。

こんなに苦戦するなんて夢にも思わなかった。

そもそも私は国家試験の最大の難関、弁護士になるための資格を得ようと努力していたが、なかなかそれが取得までには至らず、仕方なく食い繋ぎとして建築関係のアルバイトをしていたのだった。

しかし腰掛けだったそのアルバイトも、やればやる程居心地が良くなり、恐いと思っていたおじさん達とも打ち解けて、自分もいつの間にか仕事の戦力の一人として当てにされ始めた。

そんな中、ある時期に建物の基礎を作る仕事に集中して重なった時

があり、アルバイト先の会社は猫の手も借りたい程忙しくなった拳句、普段自分が遊びで乗らせてもらっていたシャベルカーの運転手が不足しているという理由でいきなり、社長は自分にその資格を取るようと、勝手に手配をしたのだった。

自分は訳も判らずに、とりあえずその流れに身を任すと、簡単な講習と簡単な試験を受けたただけであっけなくその資格を取得する事ができてしまったのだった。

簡単簡単と言ってはいるが、実際自分が試験慣れしているからそう感じただけなのかも知れないが。

そしてそれから段々と仕事の工程が基礎から躯体に移るにつれ、社長は自分にそれに必要となる資格をドンドン取らせ始めた。

クレーンの組み立てや操作、足場の組み立て解体の為の資格、鉄などを切断したり、くつつけたりする資格、他にも電気の配線作業に伴う資格や、その内設計技師、工事管理、建築士などあらゆる種類の資格を取得すると、自分はこの建築業界だけでもこんなにある資格の多さに驚き、そしてその内にその自分が持つ資格の数に妙な自信さえも感じてきた。

その後に弁護士の資格もなんとか取る事ができたが、自分はアルバイトでやっていた仕事に面白さを覚えて、しばらくはそれをやりながら、時間があると色々な資格を手当たり次第にあさり始めた。

ペン字から始まり、英検、算盤、習字、アマチュア無線、そんな一般的なものから栄養士、衛生士、理容士、美容師などの色々な専門職のもの。

しかしそんな事では満足できなくなった自分は、あらゆる乗り物の資格も欲しくなった拳句に、とうとうアルバイトの仕事を止めて軍隊に志願。

そして大型自動車からけん引、特殊車両、船舶、飛行機、車両整備、はたまたこれを機会にと射撃、火薬取扱、そして勤務の傍らを縫って、消防士、警察官、レスキューと、勉強や試験漬けの毎日を送り、そして遂には持っていない物がないほどの数の資格を自分は取得し

たのだった。

あとは何かないだろうか？

そこまで行った自分には、もうきつと取る資格はないし、あったとしてもきつと簡単にパスする筈に違いない。

今までの苦労と実績が自分には味方に着いている。

しかしそんな自信をも木っ端微塵に砕く、そんな難題な資格があった。

あれはある日、部屋のポストに入っていたチラシに書かれてた奇妙な広告から始まった。

新規恋愛運営技師生募集。

自分はイタズラか、はたまたこんなふざけた話を応用しての新手の詐欺かと、初めは気にもとめなかったが、それから二、三日した夕方に、たまたま友人と外食に出ていた自分に、それと関わる話題が持ち出されて正直驚いた。

友人は最近できたその恋愛運営技師なる資格について、さも当たり前のような話し方で会話に入れてきた。

ニュースでやっていたというそれについての説明。

この頃の少子化の波に打たれた政府は、その原因が最近の若者の恋愛離れ、いや、恋愛不安が深刻な問題と捉え、そんな若者達の為のセミナーを開くと考えたが、その講師をどうするかとなった。

そうした政策を打ち出したはいいが、恋愛のプロとはなんぞやとなった訳である。

確かに脚本家や小説家は恋愛についてのプロなのかも知れない。しかし、あれはあれであくまでも想像の域であり、現実に当てはめるには話の内容に懲りすぎている。

かと言って、どこかの大学を尋ねてみたところで専門の科として扱うものは無く、行き着くのは精神学辺りの難しい説明付きのややこしい分野くらいとなった。

しかしそんな物で今の若者が目を向けるとは到底思えない。

それならば、国の理想とする恋愛感を項目として形付け、それを試験としたのちに、資格扱いで講師を掘り出すのはどうかとなり、このようになった。

当然の如く国家試験扱いである。

それについての参考書も出版され、第一回目として開かれた試験は、かなりの難関だったとその結果が新聞などで記載されていたそうだ。自分はその話を聞いて、難関かと心がそれに反応し、ザワザワと音を立てたのに気付いた。

その帰りに寄った本屋では、小脇に参考書が抱えられ、その晩部屋の灯りが消えたのは明け方近くになったのだった。

自分はそれから、かなり厚めの参考書を読み更ける日々を過ごして、いよいよ第二回新規恋愛運営技師試験に挑む事となった。

あまり時間がなかったものの、前回の試験結果では結局合格者は一人も居らず、もし今回の試験に受かることが出来れば、資格ナンバーがうまくすると一番になる可能性がある。

自分の胸はそんな想いでいつもよりも興奮しながら、なんとか受かるであろう試験勉強結果を出せたと自分なりに思った。

しかしその問題ときたら、参考書だけではなかなかスムーズにくぐり抜けられるものではなかった。

問一、アナタの恋愛経験の内、成功したと思われる回数は何回ですか？

問二、その恋愛について、アナタが成功したと確信したその事柄について具体的に書きなさい。

問三、結婚を対象とする恋愛と、そうでない恋愛の違いはなんであ

るか答えなさい。また、その理由についても述べなさい。

問四、出会いから結婚に至るまでに、どれくらいの期間が必要だと思われるか？その理由も答えなさい。

問五、結婚する決め手となる事柄としてどんなものがあるか述べなさい。

問六、初めて会った理想の相手に効果的なアプローチの方法を述べよ。

問七、失敗しない恋愛、または結婚についてどんなことが重要か、書きなさい。

問八、危険な恋愛とはどんなものか、例を挙げなさい。

問九、もしも失恋したとしたら、どうすればまた恋愛をしたくなるかを書きなさい。

問十、恋愛よりも大切な事とは何か書きなさい。

もうあまりにも時間がなかった。

自分は額に汗がほとばしるのを感じながら、最後の答えにケリを付けたのだった。

いつもと違い、今回はやったという達成感が沸くことはなく、帰りの道はひたすら下がったままの首を擦った。

きつと、まぐれでも厳しい結果であろう。

自分はこれまで取得した資格達に、何だかブライングでもされている気がしてならなかった。

しかし、しかしだ。

あの問題に対して、本当に正解とはあるのだろうか？  
考えれば考えるほど、その答えにため息が漏れた。

それから一ヶ月ほど経ったある日、自分のところにある封書が届いた。

試験の結果だ。

自分はそれをその場で雑に開けて、きつと落ちているその結果を一応確かめた。

しかし、

自分は思わず飛び跳ねてしまった。

そう、落ちるところか受かっていたのである。

そしてその手紙にはこの先の予定にあたり、幾月かの講習を国の機関で受けて、そのカリキュラム終了後、国営恋愛促進センターの職員として契約を交わすと書かれていた。

そして資格ナンバーを確認してみると、その番号は00001と刻まれており、自分はそこが玄関の外だという事も忘れて、ニヤニヤしてしまったのだった。

自分はその晩、その意外な勝利のせいで浮かれ、祝盃を挙げようと夜の戸張へと足を運んだ。

普段あまり呑まない酒をあまりの嬉しさが手伝って、自分はかなり酔っ払ってしまった。

しかしここは無礼講だ。

自分は少しクルクル回り始めた頭をうとうとさせながら、足取りをふらつかせて二軒、三軒と酒場を梯子していたのは覚えている。

しかし、でも、隣に寝ている女の人は覚えていない。  
どういう訳だろうか？

自分はスヤスヤ横で当たり前のように寝ているその女性を恐々起こし、申し訳なさそうに当たり障りなくこの状況の訳を訪ねてみた。女性は昨晚、酔っ払った自分が述べる素晴らしいプロポーズを受けて、一緒になることを決めたと言った。

自分は狐に抓まれた勢いで呆気に捉れ、なんて事をしたのだと思っただが、さすがは資格に伴うその技術は凄いと呑気に考え、ここいらで身を固めるのもいいかと開き直ったのだった。

二人は後に結婚して子宝にも大いに恵まれたが、俺の稼ぎはそれなりだったため、例の資格取得の趣味はかなり憤まなくてはならなかった。

確かに自分の資格の数は尋常ではないが、実際それを仕事で生かすとなると、技術が伴わなかったため、この頃の自分の仕事はなかなか落ち着かず、それがその原因だと言えた。

しかし暇を見つけては、そんな資格取得のことに目を向けている自分に嫁は、  
そんな事でお金使うならもっと稼いで来てよとなじり、彼女の口癖は、

まったく、父親の資格なしね。  
であった。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ちしております。では。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2345f/>

---

ラブカクテルス その84

2010年10月14日08時38分発行